

新・につぼん聖地巡拝の旅 (あづま下り編 その⑥)

— 東日本大震災 被災地の神と仏
浄土ヶ浜の子安地蔵と早池峰神楽 —

玉岡かおる

作家

この原稿を書いている今は、ちょうど阪神淡路大震災から二十年の追悼が行われている最中だ。そして本誌が出た一月後には、東日本大震災からもまる三年が過ぎ、復興は四年目に入ることになる。

この国土の上で、あれほども多数の命が一度に失われる現場を目にした事象は、おそらく戦後生まれの者には未体験のことだった。

だからこそ、いきなり命を絶たれ、突然別れを余儀なくされた人たちのことは、忘れはしないし、また、忘れてはならないであろう。鎮魂と追悼の例年行事は、生かされ残った者が前進するためにも不可欠と思える。

そのため、皆が思いを一つに集める場所がある。炎であつたり木であつたり、立派な像であつたり簡素な塔であつたり、形や規模は問わない。ただ、その前に立つことで悲しみを洗い、何らか自分を新しく更新できるなら、それは現代の「聖地」にちがいない。

この連載は、長い歴史の中で人々が思いをさざげた「聖地」に赴き、先人たちの心に触れようと試みるものだが、そのテーマに添えば、幾多の災害を乗り越え祈りを今日につないできた地も洩らしてはならないと思える。

今回の旅では、人の記憶に刻まれて残る、祈りの聖地をみいだしてみようと思う。

● 陸前高田・奇跡の一本松を訪れて

二十年前、私も阪神淡路大震災を自宅で体験した一人だが、東日本大震災との決定的な違いは、神戸は地震による倒壊被害と二次災害の火災が主であつたが、東日本は、津波が襲い、すべて水に押し流されたという点だ。

大地震の後、海から押し寄せた津波が何もかもを飲み込み、再度、引いていく波がすべてを持ち去った。そのことはつまり、かつてそこにあつたものが、必ずしも元の場所にはないという現実を表す。

海上にあつた船が丘に残り、三階建ての校舎の窓にトラックが突っ込んで、海岸に建っていた家の屋根が数キロ離れた畑にかぶさっている。そんな、ありうるはずのない風景がいたるところで繰り広げられているのを目の当たりにし、国民みんなが言葉を失ったことはまだ記憶に新しい。

災害という、悪意なき自然現象がもたらした無秩序。それが津波の真実だ。

そして、そこからの復興は、単純に同じものの「復元」では意味をなさないことがわかる。

今度は必ず無事ですむように、前よりさらに安全に。津

波はまた同じ規模で押し寄せるかもしれないが、そのとき少しでも被害を食い止められるよう、打ち勝てる復興でないと人の文明に勝利はない。つまり、前より成長し発展した建造でなければ、本当の復興にはならないのだ。

実際に私が現地を訪れたのは、震災から三年半がたつ昨年秋のことだった。

岩手県陸前高田市。山が海に迫りながら入り組んだ海岸線を描くリアス式の三陸海岸の、南寄り、広田湾の北奥に中心部がある。

この湾へは、山から気仙川が注いでおり、川が運んだ土砂が作った砂州には高田松原と呼ばれる松原が東西に続いていた。景勝で名高い「高田松原」である。

地震が引き起こした大津波は、この海岸にまっすぐ押し寄せ、気仙川に沿って七キロ以上も遡上した。市の中心部は壊滅し、全世帯の約七割が被災、死者は千二百十一人、行方不明者が千八百八十三人を数えたことは周知の事実だ。

もちろん名所の松原も壊滅、わずかに一本、残った松は「奇跡の一本松」と呼ばれ、その生命力が人々の感動を呼んだ。

もつとも、テレビの報道などで見知っていたはずの町の

風景は、がらりと一変、目を見張らされる。

そこは、大規模開発される新興のマンモス・ニュータウンの造成地さながら、荒涼とした空間なのだ。頭上を縦横に横切るベルトコンベアは総延長三キロ。周辺の山を切り崩して土砂を運んでくるし、ダンプカーが次から次と走ってきては行き交う。

高度経済成長の時代に育った私には、いつかどこかで見た風景だ。そうだ一九七〇年代の神戸で、「山、海へ行く」ともてはやされたポートアイランドの埋め立て事業に重なるデジャヴだったと気がついた。

「あのコンベアがあるおかげで、土を運ぶダンプカーの数を激減させられるんです」

ドライブインのカフェのマスターが教えてくれた。市内の居住地を最大十二・五メートルかさ上げする工事だという。

もともと、波の最大遡上高は二十一・五メートルというから、はたしてこの大工事も、市民の命を守る安心な地盤づくりになるのかどうか。また、いくらかさ上げをして新しい土地となっても、大勢の命が奪われた跡地の上で、平気で暮らしを営めるものなのか。町作りにはまだまだ議

論が必要なのだという。

それにしても、視界をさえぎる銀色のベルトコンベアのせいで、「奇跡の一本松」も、なかなかそれと見つけられない。

海水に侵された松は、人々の願いもなしく枯れてしまっている。そこに立っているのはレプリカである。それでも、三々五々、工事中の迂回路を歩き、松に会いに行く人々は後を絶たない。誰もが、松を見上げ、遠い海を眺め、そして失われていった命に思いを馳せる。

松は、今でも、鎮魂の思いを集めるランドマークなのである。

思えば古来、日本人の想像力は、聖なるものが降臨するための「依り代」というものを用意してきた。高い山であつたり木であつたり、ともかく神や仏が座するための清浄な場所のことだ。

その意味では、レプリカであつても松は松、人の記憶がまとまっていきよらかなシンボルであることに変わりはない。あの日を悼む人々にとってはまぎれもなく「聖地」なのである。

●被災寺院が次の時代に申し送るもの

地図を見ると、気仙川沿いに、龍泉寺という曹洞宗の寺をみつけた。近くには諏訪神社もあり、海拔十メートル以上に相当するその一帯は、神仏を祭るに適した小高い地であつたことがうかがえる。

なにしろ岩手県沿岸部は、八六九(貞観十二)年の貞観の大津波以降、幕末までに限ってみても八回もの津波が襲来している。何度も恐怖を味わい被害にあつて、人々は経験から学んだことだろう。そうして前より安全と思える場所を求めて、高台へと移転が繰り返されてきたのに違いない。

それでも今回の津波は、過去の経験による備えを越えた。ここにも「想定外」と言うしかない事象が爪痕を刻む。

震災前の龍泉寺は、松の古木に囲まれた童宮スタイルの山門が印象的で、九間ある本堂も威風ただよう造りであつたらしい。一三二五(正和四)年の開山というから、最盛期には相当な規模の寺だつたであろう。

なにより、境内にある樹齢四百年の「唐傘もみじ」は、その名のとおりまるで唐傘のように枝葉が広がる老木で、

市の天然記念物にも指定されていた。

しかし、今はその木も本堂も、庫裏も東司も、あつたはずのものは跡形もない。屋根の壊れ方からすると、津波は軒の下へと襲いかかつてきたらしい。現在、唯一残っているのは位牌堂だが、本堂と見まがうほどの立派さ。陸前高田は雪が少ないこともあつて、寺院は大きな屋根が造れたのだろう。

しかし、元の威容を思うにつけ、はたして、復興にはどれほどの歳月と費用がかかるのだろう、見当もつかない。聞けば、住職は陸前高田を離れて暮らしておられるとのこと。無住同然となつた境内には人の祭もない。

唐傘もみじは、いつかそれを材にして仏像を刻む予定と聞かされたが、それはいつのことになるのであろうか。

●神戸の復興から未来を見る

まだ先の見えない東日本の被災寺院にとって、阪神淡路大震災の二十年という歳月は、一つの希望を示唆できないか。それはあきらめない着実さ。いつか復興するとのたゆまぬ精進の成果だ。瓦礫と化した神戸にみごとな再構築をなしとげよみがえらせた事実は、大きな励みになるのでは

ないかという気がする。

たとえば、楠木正成にゆかりがあることから「楠寺」の別名がある醫王山・廣嚴寺。この寺は、二十年が経過してさらに三か月たとうというこの五月に、やつと本堂を復興、落慶法要が営まれるのである。

周辺には神戸文化ホールや中央図書館、体育館など、神戸のシンボリックな文化施設が並ぶ大倉山の一角にありながら、ともかく急場しのぎの仮本堂で、寺としての営みだけを経てきた二十年。短かつたはずはない。

「楠公さん」といえば寺から南に下がった神戸駅近くの湊川神社が有名だが、歴史はこちらの寺が古く、開山は元徳元(二三三九)年、後醍醐天皇の命によって、元から入朝した明極楚俊禅師が創建した。

正成は湊川の合戦に臨むにあたり、明極禅師と問答を行って出陣した。権力に左右されず、負けと知ってもすがすがしく生きよとした「悪党らしい逸話といえよう。

彼の最期の地も、この廣嚴寺内の無為庵であつた。

もつとも、現在は湊川神社境内が終焉の地とされていて、歴史ファンの議論の分かれるところだとか。

そんな田舎のある寺も、第二次世界大戦では、堂塔、伽

藍、すべてが焼けて消失した。昭和二十(一九四五)年三月のアメリカ軍による無差別空襲、いわゆる「神戸大空襲」の犠牲となつたのだ。

運よく石蔵が戦火をまぬがれ、後醍醐天皇御親翰や、明極禅師の墨跡、大楠光・小楠光と呼ばれる楠親子の書など、寺宝が多数、残つたことは幸いだった。この楠木正成の遺徳をしのんで、松尾芭蕉もこの寺を訪れ、

なでしこに かかるなみだや 楠の露
と詠んだ。境内にはその句碑もある。

しかし、大震災は、どんな田舎の寺も貴重な文化財も、無差別に襲い、手加減はなかつた。

今度は、大震災が、この寺を全壊させてしまつたのだ。

任職の千葉悠晃さん自身、被災後は避難所での仮暮らしが続き、なんとかプレハブの仮本堂が建つたのは、周囲の家々や檀家の復興が進んで行つてからのことだった。

「もちろん、早く本堂をなんとかしたい、建て直したいという気持ちは早くからありましたよ。先代によって手がけられていた空襲被害からの復興も、まだ途中でしたからね」

寺は、檀家の人々にとって先祖をしのぶよりどこであ

り、町や地域にとつても、歴史というランドマークともいえる。だがそれも衣食足りてこそ話で、檀家の方々の暮らしの見通しがたない状況下では、お寺どころか、といった反応を痛感させられる。

「結局、二十年かかつてしまつたことになります。でも、やつと、悲願がかないました」

市民生活が立ち直り、町が復興していく中で、まさに最終ランナーとして楠寺の新築が成る。仏事だけではなく多様なイベントが行えるホールもそなえ、文字通り、新たな人の交流を生む拠点となつて生まれ変わった寺を眺めると、もう今度は焼けない、倒れない、そんな意志さえ見えてとれる。そして逆に避難所にもなりうる施設として、地域の財産としての気構えさえも感じるのだ。

はたして二十年は、あつというまたつたか、永遠のように長かつたのか？ ともかく、それだけの歳月を費やし、じつと時機が到来するまで力を蓄えた神戸の被災寺院の復興事例が、東日本の被災寺院に、何らか、励ましと希望を与えてくれることを祈るのみだ。

● 浄土ヶ浜の子安地蔵

陸前高田から海岸沿いに、大船渡、釜石、宮古と、津波の被害の大きかつた町を訪ねながら北上する。そして三陸復興国立公園の景勝地、浄土ヶ浜に到着した。

リアス式の入り組んだ浜に立てば目の前に、大小、尖つた白い流紋岩がダイナミックな並びを見せる。海から直接切り立つ岩には松が繁り、木々の緑と海の青のコントラストが目にしめる。「さながら極楽浄土のごとし」と感嘆するほどの美しさから、この地の名前の由来があるということだ。

しかしこの美しい浜も、津波はわけへだてなくのみこんだのだ。

「ここがいちばん高いものですから、観光バスがいつせいにうちの駐車場へと避難してきて、多くの人がなんとか難を逃れたのです」

屏風のような岩々を見下ろす絶景が売りの、浄土ヶ浜パークホテルは、小高い岬の頂上にあつたことから津波の被害を免れ、地震による被害を被つたにとどまつた。そして、水や暖房、自家発電があつたことから、震災後半年間、避難所となつて多くの被災者を受け入れることになつたのである。

当時の写真を見れば、この美しい景勝地が、浄土どころか、地獄となった様子を指し示す。津波によって、浜は、流されてきた瓦礫の集散地のようにすさんだ様相になっており、言葉を失う。

今なお、従業員の方々が語り部となって、宿泊客に当時のことをきかせてくれるのだが、生かされた者どうし、すべてを失いながらもここで心一つに生き抜いた避難生活の記録は、今もつて涙くますにはいられない。

白砂の浜の前にそびえる岩、岩、岩。それは、海と風とが刻んだ自然の造形で、人々はそれぞれ、黒く突き出た岩は「烏帽子岩」、小石の多い断崖には「賽の河原」と、イメージもあざやかな名をつけた。

さつぱ船という小型の船に乗せてもらって、間近までこぎ寄せてもらうことにする。

波と岩との荒々しい対峙がすぐ目の前だが、中でも、浄土ヶ浜の代表的な景色として知られる「剣の山」は、いちばん高さがある、単独の島のようにも見える。その頂に、「子安地蔵」がまつられているのが見えた。

この海で漁を生業とする人々が、家内の安全と子供の成長、そして大漁を祈った素朴なお祭りだ。厳しい自然と融和

しながら、なんとか豊かに暮らせるようにと、切なる願いをこめたのだ。

潮風にさらされて立つお堂は、誰が建てたかまつたか、いつの時代であるかも定かにはわかっていないという。わかっているのは、そこに今も変わらずお地蔵さんがあるということだけ。つまり、あの津波でも、流されることはなかったということだ。

ずっとここから見守つてあげるよ。潮騒の中に地蔵菩薩の声を聞く。それは、過去いくたびも、災害をのりこえてきた名もなき先人たちが、心から望んだにちがいない声だ。

人が日常の垢で汚すことのできない、隔絶された海の上。たしかに神仏は降臨し、海から見守つていたに違いない。ここもまた、聖地であろう。

穏やかに凪いだその日は、優しい波が打ち寄せるばかりだった。

● 早池峰神楽にこめた願い

海岸部に背を向け、盛岡方面へ、山に向かって車を走らせる。すると前方に、きわだって秀麗な山が見えてきた。霊峰、早池峰山だ。

その山頂には早池峰神社がまつられている。歴史は古く、大同元（八〇六）年、米内村の獵師、藤蔵が、山中で十一面観音の尊像に遭遇し、畏敬のあまり、奥宮を建立したのが創建といわれる。本当はどんなありがたいものを目にしたのか、神仏習合もはなはだしいが、ともかくありがたいものは、神も仏も、何でも一緒に受け入れた素朴さがほほえましい。

その後、修行で籠もつた修験山伏が祈禱の舞を行い、それがふもとの村で、神楽になって発展した。それが「早池峰神楽」だ。南北朝のころだというから五百年以上の伝統をもつことになる。

幸運にも、岩手県花巻市大迫町に伝わる大償^{おほはさま}神楽を見せていただけることになった。四十以上の演目がある中で、神楽の最後に必ず舞われるという「権現舞^{ごんげんまい}」。あらゆる災いを退散、調伏させ、人々の安泰を祈禱する舞だという。

大胆な色柄の着物に、どこかコミカルさの否めないお面。しかも、ちょっと単張な動きもあつて、観客を沸かす。きつとそうした反応が、神楽の質を進化させていったのだろう。

舞が終わつて、面をはずして現れたのは、むくつけき男

性ばかり。なまめかしい仕草で笑わせた女役が、ひげ面のオジサンだったとわかつて、また客席は盛り上がる。

そもそも神楽とは、岩戸に隠れたアマテラスを呼び戻すため、アメノウズメが岩戸の前で激しく舞つた神話を起源とする。舞を囲んだ観客たちの談笑こそが、神がおどましになるきっかけになった。神楽は、なにより神を喜ばせ、近しくそばへ来ていただくための、人の願いの集結のたと納得がいく。

第一回の重要無形民俗文化財指定、二〇〇九（平成二十一年）年にはユネスコの無形文化遺産にも登録された民俗芸能ではあるが、本来の意味は、もつと素朴だった。雪に閉ざされる期間が長い里にあつて、神楽に集まる時間は、里人にとっては、きつと数少ない楽しみであつたにちがいない。

過酷な自然に融和し、災害を受け入れながら暮らしを重ねる。そこには人間だけの力ではとても足りない大きなハングが負わされている。しかし、それを神や仏に埋めてもらうことで折り合いをつけ、また一つ、苦難の道をのりこえていく。三陸の海と早池峰の山は、そうやって連綿と受け継がれて来た人々の姿を、過不足なく伝えてくれた。

（つづく）